

ラジオ放送
＜平成29年7月～9月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.420

もくじ ~ contents

<信心あればこそ>

☞ 信心をして生き生きと生活されている方のお話

- 大晦日のお祭り
大阪府・神津教会 國安佐智子 *page 1*
- 広やかな世界へ
奈良県・奈良教会 西数枝 *page 6*
- いのちのバトン
兵庫県・長田教会 和久光代 *page 11*

<平和>

☞ 戦争体験者のお話

- 夢が持てる幸せ
兵庫県・奥平野教会 松井清 *page 16*

<ラジオドラマ> 「いろは団地B棟」

☞ 「人から人へ伝わる神心」をテーマにしたラジオドラマ

- 第1回 なっちゃんはどこへ *page 21*
- 第2回 どちらもかわいい *page 27*
- 第3回 ひとりぼっちの入院 *page 33*
- 第4回 意外なご近所さん *page 39*
- 第5回 言えなかった一言 *page 44*
- 第6回 冷たいホットケーキ *page 50*
- 第7回 小料理屋「はるよ」 *page 55*
- 第8回 恋はどっこいしょ *page 61*
- 第9回 手のひらの中の幸せ *page 66*

《信心あればこそ》

「大晦日のお祭り」

大阪府・神津教会 國安佐智子

ナレーション あまりに苦しい出来事が続くと、誰しも逃げたくなるものだと思います。しかし、信心を支えに苦難を乗り越え、今、幸せな日々を送っておられる方がいます。大阪府在住の國安佐智子さん、七十七歳の元氣なご婦人です。明るい笑顔からは、過酷な経験をされた方とは思えません。

國安さんご一家に悲劇が起こったのは、まだ結婚して間もないころでした。小児まひの四歳の長男と三歳の次男が、目を離したすきに見当たらなくなりました。外へ探しに出掛けると、

交通量の多い道路脇にいました。

「あんたたちはどこ行っているの」って、つい声を掛けたら、「お母さんが迎えに来たから、お兄ちゃん、帰ろう」って言うて、こっちへ渡ったんです。そしたら自動車に目の前でやられた。もう腰が抜けて、もうほんまにその時は、どんな言うていいやら…。

ナレ 次男が障害のある兄を守るようにして亡くなったのです。谷底に落ちるような気持ちでしたが、その翌年、長女を授かることが出来ました。無事に小学生となり、ある日、友人の家に遊びに出掛けましたが、なかなか帰りません。その時でした。近くで事故があったと連絡があ

りました。

その現場まで行きましたらね、私の娘の靴が片一方ありますねん。もうそこから歩けなくなりましてね、脇の下を持ってくれて、やっとこさ近くの外科に連れて行かれました。そうしたら、「お母さん、今ね、お嬢さんの手当をしていますから、ちよつとそちらの部屋で待つて下さい」って看護婦さんが言うんです。一時間たつても二時間たつても会わせてくれないんですね。そのうちに主人が、「連れて帰ろう」って言うたんです。「どこに行つているの」って言つたら、「もう亡くなつているよ」って言われた時には、本当にもう……。可愛いねえ、次男が亡くなった後生まれたから、また、可愛かつ

たですねん。顔も可愛らしいしね。気性も可愛いしね。もういいとこぼつかしが思い出されるんですけどね。

ナレ 二人の子どもを亡くした國安さん。張り裂けそうな思いをぶつけられるのは、教会の先生でした。嫁いだから姑に導かれて信心を始めていた國安さんでしたが、日頃から優しく教えて下さる先生に心から信頼を寄せていました。

今でも覚えてますけどね。「神様も仏もないです。金光様も何もないです。もうこんなに私のところ、不幸なことばかり出て、私が何を悪いことをしたんですか」って言いました。そうしたら、先生が泣きながらね、「私の願いがな

あ……」と言うてね、ものすごく先生も、「足らなかったなあ。悪かったなあ」と言うてね、自分の足りないところを……。うん。いや、もうあまり先生を追い詰めてもあかんあと思うほど先生も……。

ナレ ある時、先生が話してくれたお話が國安さんの胸を打ったと言います。それは金光教の教祖が家族を五人亡くしながらも、信心をして自らの心を磨いていったという話でした。

「五人も」と思いますよ。二人でこんだけつらいのに、五人亡くなって、そういう悲劇に遭いながらも、金光様は、人のせいにはせず、自分の生き方をものすごい反省したという話を聞

いたんです。金光様ってお偉い方やなあ、普通の人間じゃないわとね。私は二人を失って、こんなに参って、いっしょに死んだほうがどんなに楽しく思うのに、金光様は五人続けて亡くなって、それでそれを金神こんじんのせいにならず、自分の生き方をものすごく真摯に受け止めていかれた。その驚きが、もう一番ありましたね。うん。私、まね出来るかなあ。まねさせてもらわなアカンな、と。

ナレ 先生からよく教えられたのは、「信心は家庭に不和のないのがもとである。得をすると思って、物事をこらえるのが第一である。言い争わないのがもとである。家族中そのことを心得て信心すれば、万事におかげをくださる」と

いう教えでした。

家の中、やっぱり夫婦が仲良くしなかったら、いいことが起こらないなあ。やっぱりちよつと言ひ合いになったら、ああ、悪かったなあ、出る前に、一言多いこと言ったらあかんなあと思つたり。だから先生がおつしやるように、「家内に不和のなきがもとなり」いうことがあるなあ。

ナレ そうする中で國安家に、再び新たな命が誕生しました。男の子と女の子が生まれました。

うれしかったですよ。ただどね、二人続けて死んだから、また死ぬんじゃないかなと、う

れしいのと怖さとそれ半分半分でしたよ。また、晩にみんなの寝顔を見たら、今日も一日ありがとうございましたと、神様に手を合わせなだらおれなかったです。やあうれしいな。主人が会社から帰ってきたら、ああ、家族みんな揃つたと思つたらね。で、子どもも元気に遊んで今日も一日ありがとうございました。

ナレ それから長い月日が流れ、三人の子どもたちもそれぞれ立派な大人となりました。今、國安家の毎年の恒例行事は、大晦日に、教会で一年の無事を神様に御礼申し上げるお祭りで

す。
私がうれしいんですね。もうみんながね、

気持ち良くね、お参りして。それでやっぱり、
それぞれの気持ちがこもった物をお供えしてく
れますからね。

ナレ 様々な苦難と出合った國安さんの人生で
したが、そこを乗り越え、多くの喜びを神様に
頂いたありがたさ。その実感が年末のお祭りに
込められているでしょう。



《信心あればこそ》

「広やかな世界へ」

奈良県・奈良教会 西数枝

私はおよそ四十年の間、結婚式や葬儀式、パーティーなどで、司会、ナレーションのお仕事をさせて頂いております。現場は、大阪府内のあちこちにありますので、移動することが大変多い仕事です。通勤するにも、お取引関係の事業所を訪ねる時も、移動にはずっと車を利用してきました。

けれども今から二年前、車のリース期間が終わったのを機に、思い切って再リースをやめることにしました。幸い大阪市内の交通の便利が良い所に暮らしていますので、車が無くても、

それほど移動に困ることはなく、経費を削減するためにも、健康のためにも良いと考えたからでした。オフィスや仕事現場に行くには電車やバスを利用することにし、近場には自転車も使おうと、電動自転車も購入しました。

それまで長年、車ばかり使っていましたので、この決断はみんなを驚かせ、仕事関係の方から「愛車はどうしたの？」と尋ねられるほどでした。



ところが、電車での移動は、思っていたほど

簡単ではありませんでした。一番戸惑ったのは、ラッシュアワーの時の歩き方でした。混雑する駅の構内では、少しでも気を緩めると、人とぶつかりそうになったり、気が付けば自分だけが大勢の人の流れに逆らっていたりして、明らかに迷惑そうな眼差しを受けたりします。「あっ、失礼しました」「ごめんなさい」。その度に自分を腹立たしく思う、多難なラッシュアワーデビューでした。

乗り換えに失敗することも度々ありました。

「今日はスムーズに電車に乗れた。ラッキー！」と胸をなで下ろした瞬間、「この電車は……」という行先アナウンスを聞いて、乗り間違えたことに気付くのです。人をかき分けかき分け、慌

てて降りる始末です。

こんなふうに、最初の三カ月ぐらいは、本当に間抜けな失敗ばかりでしたが、近頃は、自分のスピードに合う人を素早く見付けて、その後ろを歩くという、流れに逆らわない工夫も出来るようになりました。乗り間違えることも、ほとんどなくなりました。

少し落ち着いてきた今から見れば、この経験は私にとってとても貴重だったと思えます。ラッシュアワーの厳しさくらい前々から分かっているつもりでしたが、実際に経験してみても、これほどのものかと知り、人の生活の中には、自分の想像の及ばない、いろんな苦労があるのだなあと気付かされたのです。

車内がゆったりしている時間帯には、老若男

女の仕草を微笑ましく眺めたり、赤ちゃんの泣き声に、「何をして欲しいんだろう？」と思ったり、通学中の生徒に話し掛けてみたりして、多くの方たちと袖を触れ合う楽しさを感じるようにもなりました。

一方、新しく買った電動自転車も、大活躍してくれています。慣れるにつれて使う距離がだんだんと伸び、ある時には十六キロもの道を移動したこともありました。

自転車に乗っていると、いろんな発見があります。例えば、歩行者や自転車は、街のあちこちで階段やスロープを上ったり下りたりしなければならず、ほとんどの道路が車優先で作られていることに気付くのです。

長年、車社会の恩恵にあずかっていた私は、

自転車や歩行者の立場を全く理解しようとしませんでした。それどころか、ゆっくり走る自転車を邪魔に思ったことさえあるのです。何と思いついた考えをしていたことでしょう。



現在、日常的に自転車で移動する距離は約七キロ。四季の移り変わりを肌で感じながら、ゆっくり移動を楽しんでいます。時には、眺めの美しさに心を奪われることもあります。川面の

向こうに沈んだ夕陽が名残を惜しむように高層ビルを茜色に染めるころに差し掛かると、思わず橋の上に自転車を止めて、しばし見入ってしまいます。

昨年の夏、仕事仲間の先輩に誘われて、立山黒部アルペンルートの中心地、室堂平へ行ききました。標高二四五〇メートルまで電車やケーブルカー、バスなどを幾度も乗り換えて上るので、以前の私なら行くことをためらったに違いありませんが、脚力に自信がついてきた私は、さっそく登山の身支度を調べ、張り切って連れて行ってもらいました。

雨の予報が出る中での出発となり、立山駅から美女平、弥陀ヶ原と登って行くうちに霧雨が降ってきて、室堂平へ到着した時は、山小屋な

どがしつぽり濡れていました。

星空など到底見られないと諦めていたことが、なんと少しずつ雲が晴れ、夜八時、天の川が出現しました。私たちはもう大喜び。翌朝の散策も晴天に恵まれました。

車を手放して以来、都会の風景にも、大自然の美しさにも感動し、天地に抱かれて生かされていることを、この身いっぱいを感じるようになりました。また、細い道で道を譲って下さる方に思わず、「ありがとうございます」と会釈をしたり、車を運転している方の優しい気遣いに心がホッと温まることもあって、人との間の距離が縮まったように思えます。

二年前、車に依存する生活をやめたのは、ごく自然な心の動きからでしたが、それは、実は

神様の促しだったのでしょう。便利さや能率から、私をちよつと引き離して、広やかな世界に導いて下さった、そんな気がしてなりません。

神様にお礼を言いながら自転車に乗り、今日もすがすがしい一日が始まります。

《信心あればこそ》

「いのちのバトン」

兵庫県・長田教会 和久光代

私は、金光教の教会に生まれました。物心ついたころ、阪神淡路大震災と宗教を利用した大きな事件が起きました。それをきっかけに、私は、教会の存在や宗教に対して疑問を持つようになり、教会の娘が嫌になりました。その後も私は、金光教のことをよく知ろうとせず、就職を機に二十歳で東京へ行きました。写真の仕事で自活したいと頑張る日々でしたが、現実にはうまくいかず、苦しい生活でした。

二十五歳の時、仕事帰りに偶然金光教の教会を見付けました。ふと、お参りしたいと思い、

扉を開けました。教会の先生は、温かく迎えてくれ、いろいろなお話を聞かせてくれました。

その中で「神様はご主人、自分は奉公人」という立場に徹し、起きてきた問題は、主人である神様がすべて責任を取って下さるから、自分は奉公人としての仕事をしつかりとやっていれば何の心配もいらない。また何が起きても、それは全て必然の出来事。まずは受け止め、神様に真剣に祈っていく中で道は開ける、というお話が強く印象に残りました。

それでも、受け止め切れない問題もありましたが、起きてきたことを、まず神様に預けるようにしました。そして、「感謝と喜びで出来事を受け止めさせてもらえる私にならせて下さい」と神様に願い続けるうちに、ふと気が付く

と、少しずつ写真の仕事で、生活が成り立つようになっていました。

先生の導きで、いつの間にか私は、信心って面白いんだなあと思うようになっていました。

半ば実家の教会を飛び出した形の私は、今までの思いを改め、父と母に心からお詫びをしました。そうしていく中で私の祈りが、「神様のお役に立つ人間にお育て下さい」と変化していきしました。そして、教会で生まれた私自身のいのちの流れを考えるようになりました。ずっと仕事一筋に來たけれど、はるか昔から続くこのいのちのバトンを次へつなげる役割があるのではと思うようになりました。

ちようどその頃、今の夫と出会いました。夫という時、私は素直で穏やかになれ、私のいの

ちが一緒にいることを喜んでるように感じました。そんな夫との間に、子どもを授かりました。愛する人がそばにいて、その人との間に授かった子がお腹の中で一日一日育っていく。私は生まれて初めて幸せということを知りました。

順調に育ってきた息子に変化が現れたのは生まれて三カ月ころでした。額の湿疹がなかなか治らず、それがジュクジュクとした膿うみに変わり、気が付くと耳が潰れ顔の形が崩れるほどまでになりました。



初めて見る息子のそんな姿に、何が起こったのか訳が分かりませんでした。そして分からないながらも、これも必然の出来事。何か意味のあることだと思い直し、これまでのように神様に心を向け、その意味を問いつけました。そう
いう中、夫の弟も幼いころ、そうだったことを知りました。義理の母は、孫の様子を見た時、

「必ず良くなるから大丈夫」と励ましてくれました。弟の様子をそばで見ていた夫も力強い味方でした。

私には、そばで状況を理解し支えてくれる家族がいる。神様は、私が問題にきちんと向き合え、乗り越えていけるよう導いて下さっているように思え、覚悟が出来ました。私は、息子のいのちの力を信じ、生きやすいように環境を整

えてあげることには力を注ぎました。そして、いつも笑顔でいるように努めました。私が母として、出来ることにしっかりと取り組めば、必ずご主人である神様が責任を取って下さる、という強い願いを持つて。そうしていく中で息子の様子は日に日に良くなっていき、いつの間にか綺麗に治ることが出来たのです。

そして息子が元気になったころ、あるお仕事を頂きました。それは、大手カメラメーカーから、子育て中のママに向けたカメラの新機種が発売されることになり、母親の目線で、取扱説明書の撮影を担当して欲しいというものでした。私に子どもがいなければこのような仕事は頂けなかったし、また、息子の体が完治していなければ出来ないことでした。このタイミング

でこの仕事を頂けたことに神様の思いを感じ、
精いっぱいお役に立たせて頂こうと感謝の気持ちで取り組みました。



撮影が終わり、メーカー側にチェックをして
もらったところ、内容を大変気に入って下さり、
取扱説明書という形ではなく、書籍化し、販売
したいと話が展開していききました。それだけで
なく、プロモーションビデオに出演することに

もなり、さらにCM化することが決まりました。
驚く展開が次々と目の前で起こりました。

人間の考えるありがたい出来事の範疇^{はんちゆう}を軽
々と飛び越え、神様は私に大きな働きを見せて
下さいました。私自身が特に大きな動きをした
わけでもなく、こういう結果を想像していたわ
けでもありません。ただ起こってくる事柄を、
喜びと感謝の心で受け、神様のお役に立ちたい
と精いっぱい取り組んでいったことがこういう
結果になっていったのです。

二十五歳の時、教会の扉を開けなければ、神
様に出合うことはなかったと思います。そう思
うと、偶然見付けたと思っていた教会も、実は、
偶然ではなく神様のお導きあつてのことなのか
もしれません。そして、私のことをいつも心配

し、祈ってくれている父や母を始め、ご先祖様の深い深い祈りが私のいのちを神様の元へとつなげてくれたように思いました。

現在息子は、三歳になります。私が神様に出会えたように、このいのちのバトン、祈りのバトンを息子につなげていきたいと思っています。

《平和》

「夢が持てる幸せ」

兵庫県・奥平野教会 松井清

ナレーション 神戸市に住む松井清さん、八十七歳。今からおよそ七十年前、松井さんは長崎県に住んでいました。両親と姉、弟、そして妹が四人の合わせて九人家族。温かく幸せに満ちた家庭でしたが、昭和二十年八月九日、長崎市に原爆が投下されました。その時、松井さんは十五歳、学徒動員で工場にいました。

あれは十一時過ぎですかね。もう本当に目もくらむすさまじい閃光せんこうに包まれました。もう輝き渡るオレンジと言いますか、それに全身包ま

れるわけですね。それで周りの物がワーンと崩れ落ち…、ということですね。

動ける人は一斉に外へ逃げ出したんですね。

もうもうと塵ちりあぐた芥で空が覆われまして、もう太陽が褐色に見えるんですね。本当にもうすさまじい情景でしたわ。何が起こったか分からない。

ナレ 幸い松井さんはかすり傷で済みました。工場は壊滅状態。至る所で火災が起こり、夕方まで自宅に帰ることが出来ませんでした。家は、爆心地からたった九百メートルの地点にありました。

家はもう無いわけです、潰れてしまつて。「ああ、駄目だったんか」。その時はね、本当に

う血が凍る思いがしましたね。

庭にですね、防空壕を掘っていたんです。そのふたをパツと上げますと、すぐそこに母の白い顔がパツと浮かびました。母はすぐ手を合わせてですね、私の顔を見て、「金光様、ありがとうございます」とございます」。そして、その母の後ろに父と弟がいたんですね。弟は、ガラスの破片を全身に浴びましてね、まあ血まみれですわな。それで奥にいた。

あと妹四人。二番目の子と一番下の子は亡くなりました。壊れたタンスの引き出しを引っ張り出してね、そこへ納めて、庭に置いてあると父は言いました。そして、一番上の妹と三番目の妹ですけれども、その二人はいなかった。救護所へ連れていってもらったということです。

でもね、無理だった。もうその日のうちに二人とも亡くなっておるんですね。母が悔やんでおりました。

翌日、その妹二人を父が焼いてやろうと。それでその畑の片隅に……。父は私に、「もう可哀想だから、見るな」と言いました。おそらく全身やけどで、むごい状態であつたと思うんです。ですから、とにかく私の記憶に残っている妹の顔というのは、やっぱり、あどけないね、女の子の顔ですわ。少女の、あるいは赤ちゃんの笑顔ですね。

父はつらかったと思いますね。とにかく子煩悩でしたからねえ。自分の子どもを自分で焼かなくやいけないというね……。むごいことです。

ナレ 八月十五日、日本の降伏と共に、長崎の中心街は無事だということを知りました。それから数日後に、父親が日頃お参りしていた金光教の教会を訪ねます。

おそらくその時、教会の先生に、そういうことなら家族を皆連れてきなさいと仰って頂いたと思うんですわ。そういうことでね、教会に落ち着かせて頂いたんですね。

もう死がそんなに身近に迫っているということは、父は思っていなかったと思いますね。もちろん私は本当にもう死ぬ間際まで亡くなるとは思わなかった。

結局、まず弟が亡くなるんですね。それから、母が亡くなりました。母は、本当に何も言いま

せんでしたね。パタツと事切れるというか。だから、ぎりぎりまで堪えていたのかもしれないね。可哀想だったと思います、例えば。子どもが次々亡くなるんです。五人亡くなったわけですから。打ちひしがれておったと思います。父なんかは最後に、教会長の長田先生を枕元にお呼びして、もう死ぬ間際に枕辺でお取次を頂いて亡くなっている。

ナレ 松井さんは家族の遺体を空き地で焼きました。遺骨は小さな花瓶に入れました。

自分の子どもを自分の手で茶毘^{だび}に付さなければならなかった親が、今度は自分が自分の子どもに茶毘にされるといいう、本当にこれはもうむ

よいことですよ、これはね。

親が子を焼き、その親が今度は子に焼かれると、そういうことは絶対にあってはならないと思います。二度とね。そういうことを起こしてはいけないと思いますね。

ナレ 松井さんは生き残った姉と二人で神戸の親戚に引き取られました。原爆で家族を失った悲しみを背負い、原爆症の不安を抱えながら、今日まで生きてこられました。松井さんに平和をどう考えるか尋ねました。

平和とは何か。それは、家族仲良くね、むつみ合う、穏やかな生活が続けられる世ですね。少年たちが自由に将来の夢を語り合って、それ

に挑戦が出来る、そういう世であることです。

それが御霊様たちの願っておられる平和だと思います。

長年の年月を経て、ああそういうことなんだなあという気がします。だから決して紋切り型に「平和」と言ったって、そうじゃないと思うんですよ。もっと本当の身近なこと、それが出来るということが、大事ななんだと思いますねえ。

ナレ 戦後七十年以上が経ちました。しかし、それは遠い昔の話ではありません。当時を生き抜いてきた人にとっては、まるで昨日のこのように感じます。ほんの少し前まで一緒に仲むつまじく暮らしていた家族。一瞬で奪われた命。平成の世になっても、多くの尊い命の上に私た

ちが生かされているということを忘れないで
たいと思います。



《ラジオドラマ》

いろは団地B棟

脚本 菊村 禮

第一回

「なっちゃんはどこへ」

登場人物

有田 さわ （無職／七十五歳）

有田 なつみ （さわの孫／小学校二年生

／八歳）

野尻 保 （求職中／二十代）

カレー屋

春子 （近所の主婦）

キン （黒猫／年齢不詳）

（せみの鳴き声 夏の訪れを表して）

キン 腹が減ったあ…。…ニャーゴ…。

カレー屋 （スピーカーから 売り声）出来た

て熱々のカレー。インドカレーはい

かが…。おいしいカレーはいかが…。

出来たて熱々のカレー。インドカレ

ーはいかが…。おいしいカレーはい

かが…。

キン （足とめて）カレー屋か。時々やつ

てくる移動販売車だ。うまそうだけ

れども、おいら、熱いのは苦手だ。

よく言うだろう「猫舌」って。…お

まえは何者かって？…。猫だよ、生

まれた時からこの「いろは団地」に

ずーっと住みついている野良猫。名

さわ

前は…。

保

キーン、キーン！ あ、いた。会え

て良かった。やろうと思つて干物の

残りを持つてきたんだ。ホラ！（紙

袋から魚のアラをとり出し、キンに

与える）

うまいぞ。

キン

（食べて）そう。おいらの名前はキ

ンて言うんだ。団地の〈近〉所をい

つもウロウロしているからなんだっ

て。

さわ

（突然、横から割り込んで）ちょい

と、保くん。

保

な、何だ、隣りのさわばあさんか。

「猫にエサはやるな！」つて、何度
言ったら分かるんだい。ゴミ袋をあ
さっちゃあ散らかす。夜中に奇妙な
声を立てて人を起こす。真っ黒けで
うす汚いいまましい野良猫め！
シッシッシー！（と言いながらカレ
ー屋の車の方へ離れる）。



さわ

カレー屋さん、中辛を二人分…。

カレー屋

ハイ。少々お待ち下さい。（食器の

音）

保

あの…二人分って…もしかして俺の？

さわ

なっちゃんのだよ、孫の。今日から夏休み。ママから、「仕事で遅くなるから二人で晩ご飯を食べてね」ってそう言われているんだよ。

保

なっちゃんかあ、かわいくなっただねえ、二年生になっただっけ、大きくなったら俺のお嫁さんにしてやってもいいな。

さわ

何言ってるんだい。誰がおまえなんかに。

なつみ

おばあちゃん、おばあちゃん…もつと遊ぼう。

さわ

なつみちゃん、ちよつと休憩、ハア、おばあちゃん疲れたよ。

なつみ

つまんないの。じゃあ表で遊んで来よう。

さわ

あ、なっちゃん、夕飯はカレーだからね。あんまり遠くへは行っちゃ駄目だよ。（ドア バタンとしまる）

（カラスの鳴き声）

さわ

…。（寝息）

春子

さわさん。回覧板ですよー、いないんですかあ。置いていきますよー。

さわ

（目覚める）…ヤダ、眠っちゃって
たんだ。…そうだ！ カレー、カレー
をチンして…。…なっちゃんはどこ？
なっちゃん。

なつみ

…。（返答はなし）

さわ

なっちゃん…。

（往來の車の音）

キン

おや、さわばあさんが真っ青になっ
て家を飛び出して行ったぞ。ついて
行ってみよう…。

さわ

（息荒く）…なっちゃんが、毎日の
ように遊んでいる公園だ。（辺りを

保

見回す）もう誰もいやしない…。（カ
ラスが鳴く）カラスだってお家へ帰
って行くんだもの…（不安になり泣
き出す）。…な、なっちゃん！

アレー。さわばあさん、どうかした
の？

さわ

なっちゃんがね、こんな時間になっ
てもまだ帰って来ないんだよ。

保

そりゃ大変だ！ ママには連絡した
の！？

さわ

何度もしたけれども電話には出ちゃ
くれないんだよ。お店が、今、立て
込んでんだろ。なっちゃん、どこに

（遠くで往來の車の音）

（カラスの鳴き声）

いるのー！ なっちゃん。

（カラスの鳴き声）

保

どこ行っただよ、なっちゃん。（公園内を見回しながら）いつも見掛けるよな、この公園で。おっ、ジャングルジム！ 懐かしいな、久しぶりに登ってみるか。ヨッコラショッ！ ドッコイショ、フー。（と登って）
…結構高いな。アレ？ あそこに寝そべっているのは、なっちゃんじゃないか。なっちゃん、なっちゃん！

さわ

（泣き声）ありがとう。どうもあり

保

がとう。何とお礼を言ったらいいのか…。

俺だってびっくり仰天しちゃったよ。まさか滑り台の中で横になって居眠りしているとは…。

さわ

高い所から見なければ、見付けることが出来なかったんだねえ。でも、どうしてジャングルジムに登ってみようかと思ったの？

保

どうしてかな？ ただ登りたくなつて…。

さわ

…ひよつとして神様…そうだ！ 神様が、保君をジャングルジムに登らせたのかも…！

保

エーッ。神様が僕をジャングルジム

に登らせた!?

さわ

保くんの心の中にも神様がいらっし

やるんだねえ。

なつみ

おばあちゃん。おなか減ったあ!

さわ

なっちゃん。今カレーをチンするか

ら。あ、二人分だけれども三等分にして。保くん、一緒に食べていってよ。

キン

保さんの心の中にも神様が…か。じ

や俺らの心の中にも? …カレー、

冷めたら少しちようだいよ。ゴロニ

ヤーン…。



《ラジオドラマ》第二回

「どちらもかわいい」

登場人物

有田 さわ （無職／七十五歳）

吉村 あかね （小学校五年生／十一歳）

吉村 健一 （あかねの弟／小学校一年

／七歳）

吉村 初江 （あかね・健一の母／三十代）

光本 （団地の主婦／五十代）

大竹 （団地の住民／工場勤務・夜

勤／三十代）

キン （黒猫／年齢不詳）

（往來の物音）

さわ

あらあら。よくもこんなにたくさん
の物を捨てられるわねえ。洋服にお
もちやに：フライパン！

キン

ゴロニヤーン。おいらは、いろは団
地に住みつく野良猫のキン。孫娘の
ことで、隣に住んでいる保さんに助
けてもらったさわさんは、今度は、
誰かに喜んでもらえるようなことを
自分でもしなければと思い立ち、団
地内の道路や広場のゴミ置き場の掃
除を始めたのだった。

さわ

あんたたち、そのビニール袋、何？
…どこに捨てようかって、迷ってた
んでしょ！

キン

「ゴミなんかじゃない！」と叫んだ
のは、いろは団地B棟の一階に住む
吉村あかねちゃん、小学校五年生。

健一

そ、そんなことはないよ。ね、お姉
ちゃん…。

あかね

…う、うん…。

さわ

（あかねに）あんた、お姉ちゃんな
らば弟に、「ゴミはゴミの日に、ゴ
ミ置き場に！」って、よく教えてあ
げなけりや駄目じゃないの。

あかね

（ヒステリックに）ピーちゃん、ピ
ーちゃん、お母さん、お母さんのせ
いなんだよ。インコのピーちゃんが
死んじやつたのは。

あかね

ゴミなんかじゃない！ピーちゃん
よ。さつきまでは生きていたんだも
の！

初江

あんたがエサやりを忘れたからでし
よ！ 人のせいにしないの。

さわ

…え？

あかね

お母さんが、いつもエサをやってく
れていたじゃないの！

初 江

出来るわけがないでしょ！ 今はパートで忙しくて、もうクタクタなんだから。

あかね

そんなに仕事で疲れるのならば辞めたらいいじゃないの！

初 江

辞められるワケないでしょ！ お父さんがリストラになっちゃったんだから。

健 一

ピーチャン、ピーチャーン！（泣く）

— 間 —

さ わ

…そう。じゃあそのインコは、捨てるんじゃないかってお墓を作って埋めておやりなさい。

あかね

…お墓？

さ わ

あんたたちの所、一階だからお庭があるでしょ、お庭にお墓を作りなさい。

あかね

お庭にお墓！

健 一

そうすればピーチャンも寂しくないね！

あかね

ありがとう、おばあさん。

（カラスの鳴き声）

光 本

ちよつと待ったあ！



大 竹 な、何ですか？

光 本 やっぱり大竹さん、あなただったの

ね！ ゴミを今時分に捨てるのは。

大 竹 （無視して）失礼します！（去りか

ける）。

光 本 逃げるのね！ お待ちなさいった

ら！

大 竹 痛いなあ、放して！ 放して下さい

よー！

さ わ 光本さんに大竹さん。二人ともおや

めなさーい！ みつともない。

光 本 だってさわさん、ゴミの日は明日よ。

それを、この人ったらいつも前の日

の夕方に出すんだから。

大 竹 今から仕事に行くんです。帰りは明

日のお昼。ゴミは今しか出せないんですよ。

光 本 （カーツとして）だからってルール

はルールよ！ みんなが迷惑してい

るんだから！

さ わ 光本さん…まあまあまあ…（と、止

めに入り）あたしにちようだい。

光本・大竹 …えっ？

さ わ そのゴミ袋。あたしが明日の朝まで

預かっておくから。

大 竹 えっ、い、いいんですかあ？

それよりも、仕事に遅れたら大変。

さ、早く、早くお出掛けなさい。

大 竹 …ハ、ハイ。そ、それじゃあ…（走り去る）。

光 本 (感心して) さわさん…。

さ わ 実はね、この前、あたしの孫が…。

光 本 なっちゃんか？

さ わ 行方不明になったんだけど、その時にあたしは、ある人から助けられたのよ。その人がこんなふうに言っていた。「どうしてか分からないけど、ふっとそんな気になったって…」。あたしはその時、その人の心の中に神様が生まれた…って思った…。

光 本 …心の中に、神様が…？

さ わ あたしの心の中にも、今、神様が生まれたのかしら…。だって、こんなふうに見えるちゃったんですもの、両

方がかわいいって…。

光 本 …両方がかわいい？ どういうこと

なの？ あたしにはサッパリ…。

さ わ ゴミ置き場をいつも清潔にしておかなければ気が済まないあなたのことも、夜勤業務で、仕方がなく前の日の夕方にゴミを出してしまいうあの人のことも、気持ちが分かる…。

光 本 両方がかわいいか。なるほどそう考

えれば争い事は無くなるわねえ。

キン (近寄る) ゴロ、ゴロニヤーン…。

さ わ キンちゃんかい。…おなか、すいて

いるんだろう。…さ、付いておいで！

エサを上げるから…。

キン 神様、ありがとう…。ニヤーン。ゴ

ロニヤーン…。



《ラジオドラマ》第三回

「ひとりぼっちの入院」

登場人物

吉村 あかね （小学校五年生／十一歳）

吉村 元男 （あかねの父／四十代）

吉村 初江 （あかねの母／三十代）

吉村 健一 （あかねの弟／八歳）

大藪 晴美 （大学生／二十歳）

看護士

キン （黒猫／年齢不詳）

あかね （不安そうに）…なんだろう。コレ

…変だなあ。

初江 ゴハンよ、あかねちゃん。さ、早

くいらっしやーい。

お母さん。ちよつと来て。

なあに？ カレーが、冷めちゃうじ

やないの。

ひざのところに、変な出っ張りが、

ほら。

初江 （触る）本当だ。お父さーん。あか

ねのひざ小僧の所にグリグリが。

（やってきて）どれどれ…何だ、こ

れは!!

キン

ゴロニヤーン。おいらは、いろは団

地に住みつく野良猫のキン。いろは

団地B棟の吉村さんのお父さんとお

母さんは、あかねちゃんを連れてあ

こちらこちらの病院を回って、医者に診てもらったところ、おいらには詳しい病名は分かんが、とにかく一刻も早く手術をして、出っ張ったグリグリを取ってしまわなければならんこととなった。…こりや大事だニャン…。

元 男

（強いて元気よく）こんな手術は朝飯前だっていう、大ベテランのお医者様なんだからね、手術は必ずうまくいく。

健 一

お姉ちゃんの手術の間、僕はずーつと廊下にいるからね。

初 江

あかね。あかねちゃん！

アナウンス（看護師）

小児科の中野先生、小

元 男

児科の中野先生、至急、ナースステ

あかね、大丈夫かー？ 手術は成功したぞー！

ーションまでいらして下さい。

健 一

良かったね、お姉ちゃん。

あかね

（大泣き）怖いよう、手術するのは

あかね

お父さん、お母さん…（うれし泣き）。

怖いよう…。

初 江

大丈夫、大丈夫だからそんなに泣か

ないの！

キ ン

手術から一週間が経ち、経過も順調

なので、そろそろ退院と決まったあの日のこと。あかねちゃんのお隣のベッドに、大学生のお姉さん・大藪晴美さんが入ってきた。

晴 美

私は大藪晴美。どうぞよろしく。

あかね

吉村あかね。十一歳です。

晴 美

私、明日、手術をするの。

あかね

あたしは一週間前にしました。

晴 美

そう。ね、どうだった？ 手術、怖くはなかった？

あかね

痛くもかゆくも。なあんてうそ。心配で心配で、夜も眠れなかったけれども、家族がみんなそろってお見舞いに来てくれたから。

晴 美

…ご家族が、そろって？

あかね

お姉さんにもいるでしょう。

晴 美

…（ポツリと）…いないの。あたし

には、お父さんも、お母さんも。

あかね

…え？

晴 美

いないのよ。お父さんは、幼稚園の時に交通事故に遭って。お母さんも、中学生の時に病気にかかって死んじやって…。

あかね

…。（声も出ない）

晴 美

おばあちゃんに育ててもらったんだけれども、大学に入ってから東京で一人住まい…。今度の病気のこと、知らせればすぐにでも飛んで来てくれるんだろうけれども、心配を掛け

ちや悪いと思つて…。

あかね

…お姉さん…。

晴美

だからお見舞いに来てくれる人は一人もいないの。

あかね

ご、ごめんなさい。

晴美

いいのよ。心配してくれてありがとう。(クスツと笑う) さっきまでは知らなかった者同士が、今ではこうしておしゃべりをして仲良しになつてゐる。寂しくなんかないよ。だから元気出してよ、あかねちゃん！ 笑つて。笑つて！

キン

晴美お姉さんが手術をする時がやってきた。

あかね

お姉さん、これ…。

晴美

…え、それ、なあに？

あかね

(ズバリと) ご神米。

晴美

(よく分からない) …ゴ、ゴシンマ
イ？

あかね

「神様のお米」って書くの。うちの
お母さんがお参りをしている「金光
教」の教会で、いつも頂いてくる、
神様のお心がこもったお米。お守り
みたいな物なんだって。

晴美

…神様、神様のお心がこもった？

あかね

私の手術の時もお母さんが届けてくれた。「持つていれば、手術は必ず
うまくいく。」って。だから、お姉

晴
美

さんにも…。

…あ、ありがとう。どうもありがとう！



キ
ン

それからしばらく経って、無事に退院したあかねちゃんは、今では毎日元気よく学校に通っている。そのあかねちゃんの元へ晴美さんから手紙

晴
美

が届いた。

（手紙の声）その後お元気ですか？

私は、ようやく元気を取り戻して大学に通う毎日です。あのお守りのことで、あかねちゃんにお礼を言わなければとペンを取りました。

晴美お姉さんからご神米のお礼だつて。お母さん。

初
江

良かったわね。…で、何ですって？

晴
美

（手紙）私、強がりを書いていましたけれども、本当はとても不安でした。でも、小学生のあかねちゃんですえ手術に耐えたじゃないの自分

あかね

で自分を励まし、あかねちゃんからもらったあの「ご神米」を握りしめました。この世に神様がいるというのなら、それはあかねちゃん、あなたの「優しい心」です。

え、えー。あたしが、神様なんだって。何だかくすぐつたいな、ねえキンちゃん。

キン

ゴロニヤーン。フーン、人間はいいなあ。こうやって「優しい心」を、すぐに表すことが出来るんだもの。おいらも今度困った人を見掛けたらペロペロなめてやるとするかあ…。



《ラジオドラマ》第四回

「意外な近所さん」

登場人物

大藪 晴美 (大学生／二十二歳)

三林 勝 (自転車店主／四十五歳)

山崎 ツル (主婦／八十五歳)

山崎 亀之介 (ツルの夫／元美術品鑑定士

／八十八歳)

医者

キン (黒猫／年齢不詳)

キン ゴロニャーン。おいらは、いろは団

地に住みつく野良猫のキン。足の骨

の手術を無事に終えて、毎日元気よ

晴美

ツル

く大学へ通っている大藪晴美さん。四年生なので卒業論文の提出などを控え、大忙しの毎日を送っている。その晴美さんが、いろは団地B棟の自宅を出て、駅への近道となつている小道を急いでいると、木造二階建ての、古いけれども何やら由緒ありげな家から一人のおばあさんが転がるようにして飛び出して来た。

だ、誰か、誰か助けて下さい！(晴美にすがりつく) お、お願い、お願いします。しゅ、主人、主人が…死にそうなんです。えっ、ええーっ！

亀之介

(うめき声 苦しげに)

ツル

(亀之介に) あ、あなた、あなたー！

晴美

(うろたえて) 救急車！一一〇番！

じゃなかった。一一九番。あたしの

スマホ、スマホはどこ！?

ツル

やめて。救急車だけは。ピーポーピー

ポーってうるさい音。ご近所様の

ご迷惑になるもの。ね、そ、それだ

けは…！

晴美

(弱って) う、うーん…。どうしよう。

勝

ごめんよー！

晴美

ああ、自転車屋のオジサン。いいところに来てくれた。車、早く車を出して！

ツル

(ワツと泣き崩れる)

医師

：ハイ、残念ではございますが、病院に運ばれてきた時には、もうすでに心肺停止の状態で…。：手は尽くしましたが…。

晴美

(悲痛に) …お、おばあさん…。

SE

(玄関のガラス戸乱暴に開いて)



キン

おじいさんの遺体が、自宅へ戻って来た。おばあさん一人だけでは何も出来ないというので、晴美さんは大学のゼミのことも卒業論文のこともひとまず置いて…。アレレ、自転車の勝さんも仕事をほっぽり出して、おじいさんのお葬式の準備をしているよ。二人とも偉いなあ…。

ツル

晴美さん、あのね…新聞社に連絡をして、「山崎亀之介が亡くなりました」って伝えてもらえませんか。

晴美

（驚いて）え、あの…「死亡記事」…おじいさんの死亡広告を出してもらうんですか？

（電話のベル音、ひっきりなしに）

キン

おじいさんの死亡広告が夕刊に出るや、大学の教授や博物館の館長さんたち、それに地元の政治家やらが大勢弔問にやつて来た。何と死んだおじいさんは生前、古い美術品を鑑定する権威者だったんだって。大勢の人たちに見送られて、おじいさんのお葬式が無事に終わった。

ツル

あなた方のおかげで、無事におじいさんのお葬式が出せました。何とお礼を言ったらよろしいのやら…。

晴美

…いえ、あたしたちは何にも…。（涙

をのんで）お一人で寂しくなられますね。

ツル （箱を二つ取り出す）：これ——。

晴美 何ですか？

ツル おじいさんが生前とりわけ大切にしていた壺つぼなんですけれども：（壺が入った箱を開ける）

勝 晴美 うわあ——。ス、スゴイ！（と、

口々に）

ツル お礼のお印までに、お二人に一つずつこれをお納め頂きたくつて。

勝 それはとてもありがたいお話です。

ねえ、晴美さん。

晴美 …え、ええ…。この壺、私は素人によく分らないのですけれども、ど

のくらいの価値があるものなのですか？

ツル 売れば、少なく見積もっても五百万

円——。

勝 ゴ、ゴヒャク…？

晴美 ゴヒャクマン円！

勝 晴美 ワワワワワッ！（ひっくり返る）

キン 晴美さんと勝さんの二人は、「どう

してももらつてくれ」と言い張るおばあさんの願いを、考えた末にとうとう断つてしまったんだ。おいらにとつちや「猫に小判」だけれども、やっぱりちよつともつたないんじゃないの？

晴
美

この間、私はある少女に助けってもらったの。病院で隣りのベッドにいた女の子。神様だと思った……。私も、私も女の子みたいに神様になればいいのになって、その時にフツと思ったの。

晴
美

晴美さんだつて神様だよ。

えっ。ヤ、ヤダー。あつ、キンちゃんがあきれた顔して、こつちを見てるじゃないの、ホホ、ホホホホ……。

勝

キ
ン

ご近所さんとは仲良くするもんだね。晴美さんも自転車屋のオジサンも良かったねえ。……ところで晴美さん、卒業論文はどうなったの？

勝
晴
美

(少し考えて)……晴美さんは、卒業論文でとても大切な時期なのにおばあさんを助けていたじゃないか。そんな晴美さんはキラキラ輝いて見えた。俺も頑張ろうっていう気持ちになれたんだ。

オジサン……。

人を助けりゃこんなにも良い気持ちになれる、それを俺に教えてくれた

《ラジオドラマ》第五回
「言えなかった一言」

登場人物

三林 勝 (自転車店主／四十五歳)

小林 満子 (医者／六十代)

村井 米作 (無職／八十代)

キン (黒猫／年齢不詳)

キン ゴロニヤーン。おいらは、いろは団

地に住みつく野良猫のキン。…ここ

は、いろは団地B棟のすぐそばにあ

る、内科・小林医院の待合室なんだ。

半年前に奥さんを亡くした米作さん

が、不機嫌な顔をして座っている。

勝

そこへ、町内会の役員をしている自転車屋の勝さんが、バス旅行のお知らせを持ってやって来た…。

米作

勝

（わざとせきをする）
（気付いて）あつ。米作さん。どこかお体の具合が？

米作

…どこもかしこも悪い。

勝

…半年以上が経ちますね。奥さんが



亡くなられてから。お一人で何かお

困りになるようなことでもあれば私

が…。

米作

(重々しく) 困らないことは、何一

つとしてない。

…え？

米作

薬はいつも良子が飲ませてくれてい

た。飲み忘れなど一度もありやしな

かったんだ。だのに、私は家内に礼

を言ったことがなかった。私が先に

逝くとばかり思っていたもんだか

ら…。

勝

いや、分かっているらしいですよ。

今の米作さんのお優しいお気持ち

は。奥さんにはちゃんあんど。

米作

そんなことが、どうしてお前さんに

分かるんだ。

勝

うちの親父とおふくろ、二人ともも

う死んでしまいましたけれども、生

きている間中、朝から晩までけんか

ばかり。ところが最近よく見る夢

の中じゃ、そりや仲よくしていまし

てねえ。あつ。夫婦っていうものは

以心伝心、相手の心の中をよく見抜

いているものなんだなあつて。

米作

じゃあ、うちの良子も？ 一度でも

「ありがとう」と言つときや良かった

たという私の気持ちも？

もちろんですとも。…あ、そうだ！

米作さん、今度のバス旅行、ご一緒

米作

にいかがですか？ 三浦半島。海を見ながら良子さんの思い出話。きつと喜んでくれると思いますよ！

（昔を思い出して）…新婚旅行も、そういえば海の近くだったなあ。バス旅行か…。行ってみるか…良子と一緒に…。

キン

良かったね、勝さん。寂しそうな米作さんを三浦半島のバス旅行へ誘うことが出来て。あ、お魚のお土産、待ってますよー。

勝

（ノック）…入っても、よろしいでしょうか？（ドア 開く）

満子

あら、自転車屋さん。

勝

先生にちよつとご相談が。米作さんを、このバス旅行にお誘いしても構いませんでしょうか？

満子

もちろんですとも。元気付けて差し上げて下さい。…私はびっくりしてしまったのよ。



勝

…びっくり？

満子

奥さんを亡くされてからいつも「死にたい」って口癖のようにおっしゃっていた米作さんが、今日は急に元気になっておられて。一体、どうしてなの？

勝

…別に……。ただ…。

満子

…ただ？

勝

ハイ。ただ亡くなられた奥さんへの思いを、待合室で少しばかり聞いて差し上げただけのことなんです。

満子

そうなんだ。

満子

こんな言葉が世の中にあることをご存知？

勝

ん？

満子

「名患者、名医を育てる」って。

勝

名患者、名医を育てる？

満子

米作さんのような頑固で医者言うことを素直に聞かない患者さん、そういう人たちを救って差し上げた！ 体ばかりではなく心の部分も。そう真剣に思い悩むことで、名医が育つという意味なのよ、これは。へーえ。

勝

満子

今日は、自転車屋さんから教わったわ。忙しいことにかこつけて、患者さんたちの心に少しも寄り添おうとはしない、そんな自分がもうつくづく嫌になっちゃって…。

勝

先生…。

満子

このところ、私は一日の診療を終え
るともうグッタリしちゃって：。「寄
る年波」っていうのかしら：。いっ
そのこともう閉めちゃおうかなあ、
なんて。

勝

し、閉める？（慌てる）じよ、冗談
じゃありません。いろは団地の人た
ちはどうなるんですか。みんなどん
どん年を取ってきている。子どもた
ちは独立して、夫婦だけで住んでい
るとか、米作さんのように男やもめ
になっちゃった人たちもいて。夜中
でも電話を一本掛けりゃあ飛んで来
てくれる満子先生がもし、もしもい
なくなっちゃったら：。困る！本

満子

勝

当に困る！：先生！辞めないでく
れよー！

：あ、ありがとう！　そうおっしや
って下さるお方が、一人でもいて下
されば：私、これからも頑張れま
す！　勝さん、本当にどうもありが
とう！

やあー。照れくさいなあ。そんなに
たくさん礼を言われると。俺、この
間、先生もよく知っている晴美さん、
あの人に助けってもらったんだ。俺も
誰かを助けられたらいいのになあつ
て、そう思っていた矢先だったんだ。
うれしいよ、先生にそんなふうに言
ってもらえて。ありがとう、ありが

キン

とう！

いいなあ…。おいらも誰かに「ありがとう」って言ったり、言ってもらいたいものだニャア…。

★ありがとう！★

《ラジオドラマ》第六回

「冷たいホットケーキ」

登場人物

小林 満子 (医者／六十代)

小林 治 (公務員／満子の夫／六十代)

山形 春代 (飲み屋のおかみ／七十代)

キン (黒猫／年齢不詳)

キン おいらの名前はキン。いろは団地に

住みつく野良猫だ。今日は、いろは

団地のすぐそばで開業している内科

医の満子先生夫婦が、息抜きにアジ

釣りに出掛けたのだ。よっ、お仲が

良ろしいことで！

(栈橋に寄せる岩波、海鳥の声)

治

この栈橋は、小アジがたくさん釣れるんだ。人がいっぱいいるだろう。

ほら、今はこうして雑談を交わしたりしているけれども、「その時」が来ると目は血走る、頭から湯気が立ち上る…。

満子

「その時」って？

治

潮止まり。満潮時と干潮時に潮が一時止まるんだ。その時にプランクトンいっときがたくさん発生する。それを狙って小アジがドバーツと。

満子

へーえ。

治

だからその時までにはこうやって、釣りざおに仕掛けをたくさん作っておくんだ。…あ、気を付けて。一本の釣り糸には七つも八つも針がくっ付いているんだから。絡まりでもすれば最後、今夜のメニュー、アジのタタキは夢と消え去る。

満子

（そっけなく）いいわよ、そしたら帰りがけにスーパーに立ち寄っておいしいお刺身を買いましょう。



満子

（歓声）ワー、釣れた、釣れた！

治

あつ、ピチピチ跳ねてる。あなた、取って！ 早く取ってー！

満子

（魚、跳ねる）こっちだって大忙しなんだから人のことなど構っちゃいられないよ！

じゃあ一人でやってみるわ。あ、取れた、取れた。面白いわねえ。今夜はアジのお刺身にタタキに、酢漬けに空揚げ！

春代

（海猫）

（荒い息）ハアー、ハア…ハア…。アイタタタ、しまった。

満子

（独り言）どうしたのかしら、あのおばあさん…。

春代

ああ、…ど、どうしよう…どうしたら…。

満子

糸が絡まっちゃっているんだわ。隣

はライバル！今のうちにあたしが

うーんとたくさん釣って…。あー、

そうだ！残ったら、のら猫のキン

ちゃんにもあげよう！

春代

もうだめだ!! 肝心な時にもうつ！

ああ今日はついてない…。

治

満子、どうかしたの？

満子

…ちよつとね…。

治

早くしないと魚の大群はあつという
間にどこかに消えてしまうよ。…あ、

（波音）

満子、ど、どこへ行くんだ！ 満子

っ、満子ーっ！

満子

おばあさん、そんなに糸が絡まっちゃ

やってさぞかしお困りでしょう。ほ

どくのを私も一緒にお手伝いしまし

よう。

春代

（ぶつきらばうに）ええ。

満子

ええっ？

春代

「手伝わんでもええ！」と、そう言
つておるんだ。

満子

…で、でも…。

春代

早う戻らんとあんた！今は、魚が

食いつきまくる潮止まりなんだから。

満子

いいんです。見てはいられませんもの。

私も一緒にほどくのをお手伝いさせて下さい。

春代

…いいのかい？ 本当に、あんた…。

治

（車のエンジンが掛かる）さあ、乗って！ 早く乗って！

満子

ハイ。（車に乗って座る）発車オ

ーライ！…（何かに気が付き）あ、

あなた、ちよつと待って。誰か走っ

てくる。あれはさっきの…！

春代

（荒い息）待ってえ！ ちよつと、

ちよつと、待ってえ！

満子

（車のドア 開く）あ、おばあさん！

春代

あたしは、は、「春代」って名だ。

満子

（息切れ）…春代さん…。

春代

さっきはどうも…。あの、コ、コレ

…。

満子

な、何ですか？

春代

ほんのお礼の気持ち。嫁が今朝焼い

たんだ。食べて。それじゃあ…。（駆

け去る）

満子

あー、待って！ 春代さん、待って

下さーい。そんな、そんなお礼だな

んて…。ああ、行ってしまった…何

かしら…。（紙袋 開ける）

満子

…ホットケーキが二枚…。

治

ホットケーキかあ、腹、減ったから

満
子

早速頂こう。(食べながら) うん？
大分固くなっちゃってるね。このホ
ットケーキ、今朝焼いてラップもか
けずに置いといたんだな。

お礼を言わなければならないのはあ
たしの方…。

治

どうして？ 釣り糸をほどくお手伝
いをしてあげたのは…。

満
子

(遮る)「人を助けたい」って、そ
う思わせてくれたのはあの春代さん
なんだから…。

満
子

あたし、この前、自転車屋さんから、
「満子先生、辞めないで！」って言
ってもらえてうれしかった。その一

キ
ン

言で助けられた。だからあたしもつ
て。今日、その願いがかなった。春
代さんになえてもらったのよ。良
かった、本当に良かった…。

良かったね、満子先生。ところで小
アジはどのくらい釣れたのかなあ。
残り物でもいいから早く食べさせて
くれよ。待ってますよ、ニャー、腹
が減ったあ…。



《ラジオドラマ》第七回

「小料理屋『はるよ』」

登場人物

山形 春代 (飲み屋の女将／七十代)

山形 じゅん子 (春代の嫁／四十代)

山形 利男 (春代の孫／十五歳)

南 和也 (会社員／二十五歳)

近藤 誠一 (和也の上司／四十代)

キン (黒猫／年齢不詳)

キン ゴロニャーン。

春代 じゅん子さん。あなたが戸を開けっ

放しにしているから、入って来ちゃ

ったじゃないの、野良猫のキンちゃ

キン

んが。

(溜息) 冷たいんだからア。春代さんは。おいらは、いろは団地に住みつく野良猫のキン。ここは、「おふくろの味」を売りにした小料理屋の「はるよ」。

春代 利男ちゃん、行つてらっしゃーい。

利男 行つてきまーす、おばあちゃん。

春代 …アア、お母さんは？

利男 まだ寝てるよ。

春代 ええーっ。今日は利男ちゃんの高校の入学式だというのに…。

(夕暮れのカラス)

春代

じゅん子さーん。ほら、店を開ける時間よー。さ、早くのれんを出して。

じゅん子

あつ。ハ、ハイ。

(引き戸 開ける)

誠一

こんばんは。

じゅん子

まあ。あ、いらっしやいませ。お義母^{かあ}さーん。いろは商事の近藤課長さん

よー。

春代

いらっしやいませ。…あら、今日は、随分お若いお方と。やっぱり同じ営業部の？

誠一

南和也君。

和也

…どうぞ、よろしくお願いします。

誠一

とりあえずビールで。

春代

じゃあ、後は、お見繕いということ
で。(去る)

(調理の音)



春代

じゅん子さん。アジのタタキ。ホラ、今出来たから早く課長さんの所へ。

じゅん子

ハイ。(と、皿を持って行き掛けるが) …お義母さん、今、ちよっと

まずいんじゃないですか？

春代

…え？

じゅん子

だって…ほら…。

誠 一

(ビール 注いで) 君、君。君は、

この頃毎晩、夜遅くまでスマホに熱

中しているんだろう。だから、寝不

足になって――。こんなにゲッソリ

とした顔で、お客様回りは相手に対

して失礼だとは思わんのか。

…。

和 也
誠 一

同期の林君を見たまえ。昨日は、ほ

へと工業から一千万円の契約を取っ

てきたぞ。

…。

和 也
誠 一

生活が乱れているから仕事がかど

らんのだ。(ケータイ音 取って)

モシモシ。えっ、なんだって？ …

ウン、ウン…。分かった。すぐに戻

る。(携帯を切り) おかみー、お春
さーん。

ハ、ハイ。

春 代
誠 一

(慌ただしく) お勘定、付けといて。

春 代 …何か、ご心配事でも？

誠 一 おふくろの調子が急に悪くなったっ

て。今、女房から。じゃあ…(と、

そそくさと去る)。

(戸を開ける)

春 代 (ビール コップに注いで) 課長さ

んて、いつもお優しいんですね。

和 也 優しい？ あの課長が、ですか？

春 代 ええ。

和也

と、とんでもありません！ 今日も朝から僕の営業成績の悪いことをネチネチ。今だって、グダグダと小言の嵐。もう、僕は耐え切れない！辞めてやる！ 明日、会社を！

春代

へーえ。辞めてどこの会社へ移るのか私には分かりませんけれどもね、まあ、もう二度と巡り会うことはないと思いますよ、あんなに真剣にあなたのことを叱って下さる上司には。

和也

（不思議そうに）…えっ？

春代

課長さん、今、お母さんの介護でとても大変なんですよ。奥さんもそのお疲れから体調を崩しがちだってい

和也

つもこぼされていますし。そんな大変な中、あなたを誘って、こうしてごちそうまでして下さって——。「頑張れよー」っていう愛情がもしもなかったとしたならば、とても…。
：頑張れよー！ っていう愛情!?（考え込む）。

（戸開く）

利男

（元気よく）ただいまー！

じゅん子

：利男、お帰り。

春代

（元気良く）お帰りー！ 入学式は、

どうだった？

利男

おばあちゃん、ありがとう。おばあ

ちゃんが言った通りだった！

春代 それは良かった、本当に良かったねえ。

じゅん子 何なんですか？ その、「おばあち

ゃんが言った通り」って。

春代 それはねえ…（何かを話し掛ける）。

利男 （遮る）僕が言う。

利男 僕、第一志望の高校の入試に落ちた

時、谷底に真つ逆さまに落ちて行く

ような気分になっちゃった。でも、

おばあちゃんが、僕にこう言ってく

れたんだ。

利男 「自分の学力に見合った学校がいい

よ。優等生の中の劣等生は本当につ

らいものだ。みんなと仲良く、元氣

に、楽しく通える高校が一番さ。神

様が選んで下さった高校なんだか

ら、胸を張って通いなさい」ってね。

じゅん子 ……神様が？

春代 そう、そうなんだよ。どんなことで

も思い方の違い一つで、「幸せ」と

「不幸せ」が分かれていくんだよ…。

和也 （中OFFから突然、ワツと泣く）

課長、心配かけてすみませんでした

ー！

（びっくり仰天）えーっ！！

利男 あの人、だあれ？ どうかしたの？

キン 利男君、びっくり仰天しちゃったよ

ねえ…。でも、あの若い会社員、す
っかり元気を取り戻し、その後には春
代さんが作ってくれた雑炊を、三杯
もおかわりをして元気よく帰って行
ったよ。良かったねえ、ニャーゴ。



《ラジオドラマ》第八回

「恋はどっこいしょ」

登場人物

南 和也

（会社員／二十五歳）

大場大吉

（無職／八十代）

吉田みな子

（会社員／大吉の娘／四十三歳）

大原妙子

（介護施設の職員／二十五歳）

タクシー運転手

キン

（黒猫／年齢不詳）

キン

ゴロニヤーン。おいらは、いろは団

地に住みついている野良猫、名前は

キン。さて会社で営業を担当してい

る南和也さん。先日、課長からのお

和 也

（タクシー 車内）良かったなあ、

無理だとばかり思っていた契約、ま

さかこんなに簡単に取れちゃうと

は。課長に早く報告をしなければあ

あれ、それにしてもこのタクシー進

まないなあ。運転手さん、この渋滞、

何かあったの！

（車のクラクションの音、けたたましく）

運転手

何かこの先で事故があったみたい

和也

で。こりゃあ、当分動きそうもないですね、お客さん。

弱ったなあ。会社まではまだしばらくあるというのに……。仕方がない、歩いて行こう。…運転手さん、…ここで降りるから支払いを。

(クラクション 足音)



和也

(口笛) 歩いた方が早いや…あれ、あそこにいるのは妙子さんじゃないのかな。

キン

渋滞に巻き込まれた車を尻目に、和也さんが歩道を歩いていくと、脇に

和也

止まっているワゴン車の助手席に座っていたのは、和也さんの小、中学校時代の同級生、大原妙子さんだった。妙子さんは介護の仕事に就いて、今はおじいさんやおばあさんたちを、デイサービスの施設からそれぞれの自宅へ送っている最中なのだった。

妙子

(トントントン 車のドアをたたく) 妙子さん。

(ウインドウ 開く) あら、和也さん…。

和也

やおお久しぶり。すごい渋滞に巻き込まれちゃいましたね、僕のように

歩いたら。

妙子

ウーン。（と考えて）あなたのよう
に歩いて家に戻る人はこの車の中
には一人もいやしないのよ。

和也

…そうか。大変だなあ…そういうえば
同窓会のお知らせ、届いたでしょう。

妙子

同窓会のお知らせ…？…ああ、来
た来た。（ケータイの音）あつ。ち
よつと待っててね。（電話 取り）

ハイ、モシモシ…。

みな子

（電話の声）大場大吉の娘ですが、
おじいちゃんはいつ戻って来るん
ですか？一刻も早くおじいちゃんに
家に戻って来てもらわないと困るの
です。晩ご飯を食べさせた後に、今

妙子

度は、息子を、保育所へ迎えに行か
なければならぬんですから。今、
どの辺りにいるんですか！？

みな子

お宅の近くまで来てはいるのですけ
れども、交通渋滞にはまっちゃいま
して…いつ頃になるか…。

和也

（電話の声）ええーっ。こ、困る！
困るんです！もうすぐ保育所が閉
まっちゃうんですから！

妙子

妙子さん！大吉さんて、どの人？
この人、私の後ろのおじいちゃん。

和也

降ろして！

妙子

えっ？

和也

大吉さんを早く降ろしてよ。

妙子

電話、聞こえてたの。

和也

僕が付き添ってご自宅までお送りするから。

妙子

無理よ、大吉さん、そう長くは歩けないんだから。

和也

う、うーん。…そ、それじゃあ…負ぶっていく、僕が負ぶってご自宅へ。

妙子

(ドア開ける) えっ、ええーっ！
さあ、大吉さん。(降ろす音) 僕の

和也

背中に。ソレ、どっこいしょ！

妙子

気を付けて、和也さん。

キン

和也さんは、大吉さんに背中を向けてひざまづくと、大吉さんを背負い、妙子さんを道案内にしてしっかりした足取りで歩き出した。だけど、何

みな子

だってまた、そんなに一生懸命に…。

あ、ありがとうございました！ホントに助かりました！ おじいちゃん、お帰りー！ すぐに晩ご飯。(妙子に) 今度は水曜日ですね。また、よろしくお願い致しますー！ (家の中に)

妙子

またね、大吉さん。(見送って) フーッ。間に合って本当に良かったあ！。

和也

(大きなため息) 生きてくのって、みんな、それぞれに本当に大変なんですねえ。

妙子

さ、早く戻らなければ。車はどうな

ったのかしら……。 (運転手の携帯に

電話) もしもし。そちらは? ……そ

うですか。それは良かったです。じ

ゃあ、これからセンターに戻ります

(電話 切る)。 (和也に) あーっ、

良かった。渋滞は解消されて、皆さ

んを無事にご自宅へ送り届けられた

って。和也さんのおかげよ。何とお

礼を言ったらいいのか……。

和也

お礼だなんて。実はこの前、僕はあ

る人に助けてもらったんです。僕も

誰かを助けることが出来たらいいな

って。でも、「助けてあげたいな」って思

ったとしても、実際はなかなか……。

和也

(得意げに) 人を助けてこそその人間

じゃないのかな。 ……ところで、妙子

さん、同窓会のことなんだけれども、

一緒に行けるかな?

帰って夫の都合も聞いてみる。

夫!?

妙子

この春に結婚したのよ、私。まだ新

婚ホヤホヤ……。

和也

あ、ああ……そうだったのかあ……。

キン

おやおや、和也さん、がっかりしち

やったよね。人を助ける時には、「下

心」を持つてはいけないのだよ、分

かったかい? ニャーゴ。

妙子

《ラジオドラマ》第九回

「手のひらの中の幸せ」

登場人物

大場 大吉（無職／八十代）

吉田 みな子（大吉の娘／主婦／会社員

／四十代）

野尻 保（介護職員／二十代）

米川 和美（看護師／四十代）

細川 幸子（介護職員／二十代）

有田 さわ（無職／七十四歳）

キン（黒猫／年齢不詳）

キン ゴロ、ゴロニヤーン。おいらはいろ

は団地に住みつく野良猫のキン。

和 美

みな子

脳梗塞^{のうこうそく}で体が不自由になってしまった大吉さんの家へ、入浴サービスの車が横付けされた。看護師の和美さんが、スタッフの人たちに向かってテキパキ指示を出している。大きな風呂桶を家の中へと運んでいるのは、野尻保さん。体を洗ったり、服を着せたりする役目は、細川幸子さんだ。大吉さんの娘さんのみな子さんがそばに付き添っている。

看護師さん。おじいちゃん、この頃あんまりご飯を食べないので少し心配しているのですけれども。

この暑さなんですから、若い人だっ

て食が細くなりますよ。では、お熱を計ってみましょう。（体温計の計測音）六度三分です。入浴はOK。保さん。

保

ハイ。では大吉さん。お風呂に入りますよ。私の肩につかまって下さい。：（少し苦しそうに）ヨイシヨ、ヨイシヨ。さあ！（大吉を湯船の中へ）

大吉

あああー。（と、気持ちが良いそうに）

（お風呂湯の音）

幸子

大吉さん、じゃあまずは髪の毛から

みな子

洗いましょうか。目をつぶっていて下さいね。（シャンプー。湯の音）アラ、お爪が随分伸びてしまいましたね。後で私がお切りしましょう。：モシ、モシ。眠っちゃだめですよ。（笑って）本当に気持ちが良さそう。：。楽しみにしているのですよ、週に一度のこの時間を。良かったねえ、おじいちゃん。

（湯音）

幸子

さあ、そろそろお風呂から上がりま



しょうか、保さん。よろしくお願い致します。

保

ハ、ハイ。では、大吉さん。私の肩にしっかりとつかまっついて下さい。

(掛け声) せーの。…あつ、イ、イタツ。アイタタタ…。

和美

(驚いて) 保さん。ど、どうかしたのですか？

保

…実は、前のお宅で少し腰を痛めてしましまして…。

大吉

…。(モニヨモニヨモニヨ…)

みな子

おじいちゃん、なあに？ 何が言いたいのか？

和美

保さん。利用者様がご心配なさるようなことは絶対に言っではなりません

保

ん。…まったく若い人っていうのは…。
…ス、スミマセン…。

(カラス)

保

ヨッコラシヨ。(と、ベンチに腰を下ろす) ハァー。今日も疲れたなあ…。イタツ。アイタタタ…。

キン

ゴロ、ゴロニャーン。

保

キン。お前なのか。お前は、結構なご身分でうらやましいなあ。働かないでも生きていけるんだもん。

幸子

保さん。保さぁーん。

保

あつ。幸子さん。どうかしたんですか？

幸子

今、保さんのお宅へ寄ったのよ。呼び鈴を鳴らしていたらお隣のおばあさんが出ていらして…。

保

さわばあさんが？

幸子

「この公園のベンチによく座っているから行ってみたら」って、そう親切に教えてくれたから来てみたらやつぱり。良かった！ 会えて。

保

…僕に、何かご用でも？

幸子

手、手を出してみて。

保

…えっ？

幸子

あなたの手よ。握りしめたいから。

保

（驚愕）えっ。そ、そんな！ そりゃ僕は、幸子さんのことが大好きです。手を握られたらどんなにいいか

幸子

なって、いつも思っていました。でも…。

保

（プツと吹き出す）何を言ってるの。ソレはソレとして。さ、早く手を出して。

幸子

…ハ、ハイ…。
あのね、さっき大吉さんのお着替えを済ませて、ベッドの上に寝かせて差し上げたら、あなたのほうをじつとご覧になって…。

保

…僕のほうを？

幸子

ええ。そして私の手を握りしめると、今度は、私の手の平にカタカナで大きく字を書かれたのよ。見てね。
今、保さんの手の平にそれを書いて

あげるから。

保

…（読んで）ア、リ、ガ、ト、ウ…。
（感動して）あの大吉さんが…！

キン

ゴロニャーン。

保

保

あれ、キン。どうしたの？ 今日、博士帽なんかかぶって。

キン

ゴロニャーン。…エッヘン。（と、もったいぶって）「人が人を助けるのが人間」――。

さわ

保

えっ。キン。今、今、何て言ったんだい？ 確か…人が、人を助けるのが…。

キン

人間！（と、キツパリ言って）自

分の子どもが川に流されていくのを見ても、助けることが出来ない、そんな哀れな猫のおいらが言うのだから間違いはなし！

（じつと考える）…自分の子どもが、川に流されてゆくのを見ても…：…そうか。助けることが出来るのは、我々人間だけなのか…。

（ドア たたく）保くーん。カレーを持って来たわよー。孫のなっちゃんを探してくれたあの日から、ちょうど一年が経ったんだもの。恩を忘れちゃいけないと思ってね。保くーん、保くーん！ まだ寝ているのー？ もうお昼よー、保くーん。

保

（ハッと目覚める）あつ、ああ…。
夢。今のは夢だったのか…。キン、
キーン。…キンちゃん、どこにいる
んだ…。

キン

ゴロ、ゴロニヤーン。どこにも行き
やしないよ。おいらはいつも、いつ
もみんなの心の中にいるのだ――。



金光教本部 ラジオ放送係

住 所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電 話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分

東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分

朝日放送 水曜日 あさ4時50分

RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

